

## **“Culture” in globalization around 1935—International Congress for the Defense of Culture and International Institute of Intellectual Cooperation**

MATSUMOTO, Katsuya

### Abstract

In this paper, I analyzed cultural discourses on globalization around 1935. In particular, I focused on International Congress for the Defense of Culture and International Institute of Intellectual Cooperation in light of the global trend at the time.

In Chapter 1, I examined the discourse on international cultural projects in 1935 along with the above awareness of the problem.

In Chapter 2, I focused on International Congress for the Defense of Culture, and investigated and analyzed contemporary discourses on the introduction in Japan and how to accept it. In the next three chapters, I focused on International Institute of Intellectual Cooperation, and investigated and analyzed contemporary discourses on the introduction in Japan and how it was accepted.

In Chapter 4, I summarized the above discussion and presented a conclusion. I thought that the discourse to defend culture against the fascist crisis saw success in 1935, but then, gradually lost power as a result of the start of the Sino-Japanese War.

# 昭和一〇年前後・世界化する〈文化〉

## ——文化擁護国際作家会議／知的協力国際会議

松本和也

### I

満洲事変から日中戦争開戦へと至る数年間は、文学史上において文芸復興期と呼ばれてきた。この間、さまざまな実践・論題が展開されていったが、《世界的同時性》<sup>(1)</sup>・世界化の進行もまた顕著な事態の一つであったし、そのあらわれとして、一九三四年には国際文化振興会<sup>(2)</sup>が設立されてもいる。

本稿では、こうした時期において〈文化〉<sup>(3)</sup>がどのように論じられていたか、同時代言説の調査・分析から検討する試みである。こうした問題領域は、歴史的なものであると同時に、すぐれて今日的なものでもある。そのことは、文化庁による二〇〇〇年代の海外向け日本紹介事業にふれる山本亮介が、すでに次のように指摘している。

ちなみに類似の文化政策は、すでに満洲事変から国連脱退へと向かう時期、対外文化工作の一環として企画

されそこに多くの文学者らが関わることになった。内憂外患期の文化交流、左派退潮期の国際志向、対欧米／対アジアの非対称性や、海外の諸個人による翻訳活動、現役作家らの対外翻訳意識など、昭和戦前・戦中期の日本文学翻訳の取り組みからは、現在のそれを照射するさまざまな観点が得られるはずである。<sup>(4)</sup>

また、昭和一〇年代中葉から振り返った昭和一〇年前後における〈文化〉論の動向については、次に引く、大山功「新文化の創造へ」(『早稲田文学』昭15・10)が示唆的である。《数年前、わが国の芸術文化人によつて文化の擁護といふことが叫ばれた》ことを振り返る大山は、《当時、時代の波におされて、わが国にもファッショ的空氣が醸成され、文化方面に於ける抑圧が次第に手きびしくなりつゝ、あつた時》に、《彼等が立つて文化の擁護を叫んだのも当然すぎる程当然のことだつた》としながらも、《今にして考へるところの文化擁護の叫びには幾多の誤謬があつた》(6頁)とその歴史的な意味の変容を指摘する。《文化の擁護が唱導せられてから幾年かの歳月が流れ》、《時代は急転廻した》という大山は、《殊に此処の日支事変を契機としてわが国は文字通りの非常時体制に入つた》(8頁)ことを重視し、次のように論じていく。

要するに、今日の切迫した時代に際して、芸術文化は明確に文化の転換期にあることを認識すべきである。そして嘗て彼等の呼んだ文化の擁護などといふ空虚な美名に幻惑されて、文化反動のとりこになつてはならない。今日のはげしい世界状況社会状況は、一時文化の空虚を来すかもしれないが、それは決して文化そのもの、否定ではなく、もはや何等の要をもなさない旧文化の否定であり、同時に新文化への陣痛時代の不可

避的な一時現象に外ならない。そして芸術文化人はその新文化創造へ向つて積極的に動くことこそ、今日の時代に於て、彼等に課せられた国民的使命であることを知らなければならぬ。(11頁)

本稿のねらいの一つは、右にいう《文化の擁護》が、昭和一〇年前後の日本において、どのように受容・言表されていたのかを検証していくことにある(本稿Ⅱ・Ⅲ)。こうした〈文化〉論が知識人向けだとするならば、本稿ではもう一つ、より大衆向けの〈文化〉についても、日本文化の海外に向けての発信・紹介という論題を通して、世界化という観点から検討していきたい(本稿Ⅰ・Ⅳ)。

たとえば、《国際文化振興会》で、日本の現代文学を海外によく知らせることをしようといふ計画が熟しつつある《ことを聞いた阿部知二は、「現代日本文学」(『セルパン』昭10・3)において、《一体、どんなものが、これがわが国の現代文学の姿である、といひ得るのだらうか》(68頁)と自問し、次のような考察へと至る。

おそらくそれに対する唯一の答えは、民族的な自覚のある文学が少いといふことであらう。「略」もつと突きつめていへば、民族的な特質を反省した文学に乏しいといふことである。国粹義文学にも反省がなく又、西洋文学化したものにも反省がない。この間隙から、真のわれわれの生活の現実を代表するやうな文学が逃げて行つてしまつてゐる。(69頁)

こうして阿部は、日本文化を海外に発信するという事態に直面したところで、日本文化自体を問ひ直すに至つ

ている。また、現在へと至る日本文化の変容を考察する三木清は「日本文化と外国文化」(『セルパン』昭10・8)において、外国文化との相互交渉によつて形成されたものとして、次のように日本文化の特徴を論じている。

儒教や仏教が日本において単なる支那思想でも単なる印度思想でもなくなつたやうに、西洋思想も日本においてもはや単なる西洋思想でなくなりつつあるのであり、今後更にさうなるであらう。日本的なものが何であるかを知るためには、日本仏教史や日本儒教史を度外視することができぬやうに、やがて日本における西洋思想発達史を局外におくことが不可能である。(7頁)

こうして、支那／印度／西洋の思想が混淆したものとして日本文化を捉える三木は、《ともかく日本の現実の社会の西洋化は動かし難い事実であり、そのために文化の方面においても西洋的なものに対する要求を抑止することは不可能である》ことを前提とした上で、《このやうな状態の中からやがて日本的なものが生れて来るであらう》と予言し、《しかしこの日本的なものとは決して西洋的なものを排除したものでなく、却つて西洋的なものを包んだもの、西洋的なものを通じてもしくは西洋的なものうちに生れるもの》(9頁)だと付言していた。

より広い観点からは、田中耕太郎が「文化問題の世界観的基礎」(『中央公論』昭10・8)を著し、《我々は文化問題を法・国家及び政治の世界観的基礎から如何に観察しなければならぬか》という問いかけのもと、次のように日本文化をめぐる直近の動向を整理していた。

例へば具体的問題として、近時特に日本精神及び日本文化の研究の必要が主張せられ、又東洋文化の研究が奨励せられてゐる。其の為に日本精神文化研究所其他日本及び東洋文化に関する諸施設が続出した。是れ従来西洋文化偏重の嫌があり、世間が此等の方面に関心を持つことが少かつたことに對する反動と見るべく、極めて正当なる要求と云はなければならぬ。又斯くの如き日本的及び東洋的文化に對する関心は國際的の意義を有するやうになり、國際文化振興会の如き大規模な組織体が成立し、我が朝野の人士は我が國固有の文化の海外宣揚に大童になつてゐる。(4頁)

さらに、《國際文化振興の事業は自國文化紹介を以て尽きたりと為すを得ず、我々は更に世界共通文化の創造及び發達に貢獻しなければならぬ》(21頁)と指摘する田中は、《國際文化振興の第一の方面として世界歴史上我が民族に課せられた特殊の使命を分業的に果たすことも必要であるが、第二の方面として人類共通文化の建設及び發展に貢獻することは第一の任務に優るとも劣らない重要な意義を有する事柄》だと論じ、《是に於てか民族主義と世界人類主義、祖国愛と人類愛とは完全に一致する》(22～23頁)のだと断じていた。

もちろん、これらは国内外の状況に即した日本の文化発信という要請があつてのことでもある。清澤冽「日本文化の侵略性」〔改造〕昭10・12)では、ボストンの博物館の觀覽体験に即した文化論が展開されている。《刀劍のところでスツとい、氣持になつてゐた》という清澤は、《現代日本美術の最高峰〔大觀、檜鳳、百穂、清方〕のところに来ると、急にしほれかへつてしまつた》、《先程から觀て来て泰西の歴史的逸品と比べて何といふ見劣り方だ》(290頁)という感想をもらして、日本文化の脆弱さを指摘する。清澤によれば、《一國の文化が外国

に流れる場合には、この落款は余り買はれないで、内在的価値が評価の標準になる》のだが、《日本の送り出さうとするものは落款であり、先方の捜してゐるのは落款をぬきにした価値》であるため、《そこに現在の文化方針の食ひちがひがある》(291頁)のだという。ここにいう《落款》とは、芸術家の経歴―名前に含意される価値である。

にもかかわらず／それゆえに、《特に非常時になつてから、日本は世界一なり、世界一の持つ芸術と文化は亦世界一なり、故にこの世界一の芸術を感嘆せざる筈なし、といふやうな論理が流行するやうになつてから、日本の文化は国家的援助の下に勢ひよく流出してゐる》という実情を、清澤は報告している。こうして、日本文化の海外展開にふれる清澤はて、《この文化振興のために出来たのが国際文化振興会》(292頁)だと指摘し、《日本文化の侵略性といふものは嘘のやうに少ないことが分る》、《外国のものが日本に這入つて来ると、パパママまでが国体明徴に害があるもののだが、日本文化は放つておいても、どこの国が危険を感ずるのだらう》(294頁)と、海外に紹介される日本文化の毒のなさが指摘される。ただし、それと同時に清澤は、《非常時以来の日本の行動を見て、また流れ出る日本製品を観て、これが改めて世界の問題になつた》(295頁)ことも指摘している。

以上を総じて、満洲事変、国際連盟脱退以後、昭和一〇年前後の日本において《文化》―日本文化(論)とは、すでに国内だけではなく、諸外国との関わりが不可避な、つまりは世界化された論題となっていたのだ。

## II

時系列が前後するが、〈文化〉が問題化されていく前提となる世界的な動向を、まずは、次に引く石濱知行「ヨオロッパ諸国の文化政策」(『文芸』昭11・10)に即して確認しておこう。

いまサヴェート連邦を除いた以外の諸国では、殆んど世界を挙げて、多かれ少かれファツシヨ又はファツシヨ的な政治が行はれ、その傾向は今後とも強化されると推測される。……とても同じである。従つて芸術、新聞、ラヂオ等に対する文化政策も当然ファツシヨ化される危険がある。そこでここでは、現在世界の代表的ファツシヨ国家たるドイツとイタリーの文化政策の現状を研究して、やがて襲ひ来るであらう……ファツシヨの文化政策に対する対策を考慮するの必要を指摘して置き度い。

ファツシヨ文化政策の特色は、国民主義(民族主義)的、国粹的、好戦的、反自由主義的な所にある。これは、一般ファツシヨ政治の基調的特色であつて、文化政策に於いても同様である。(34～35頁)

こうした風潮に抗するようにして、パリで開催された文化擁護国際作家会議 *Congres International des Ecrivains pour la Defense de la Culture* については、日本でも複数のメディアで紹介されていく。

第一に、「国際文化情報 国際作家会議報告」(『セルパン』昭10・9)がある。同誌では、『国際文化擁護作家会議といふ名目は、はつきり云へば国際的に作家たちが提携して、文化の擁護手段を講じようとするための会議』(8頁)だという位置づけを示した上で、「会議の意義」については次のように紹介していた。



既に幾度か資本主義文化の行詰りといひ、人間の力強き叡智に対する懷疑、不安、ペシニスムといひ、文化、殊に文学に対する不安、迷妄といふやうな、兎にも角にも資本主義文化の無力を示すやうな問題は、世界の多くの国々で近来、殊に文化の中心問題となつてゐた。(8頁)

さらに、《会議の課題は、擁護のための手段を議するのみならず、社会生活に於る芸術に就てのブルジョア的見解を是正すること》、《抗議すること》、《文化の擁護とファシズムの暴戾に対する闘争の一段階を踏むこと》(9頁)だと要約され、アンドレ・ジイド「文化の擁護(抄訳)」をはじめ、当日の発言も訳出・紹介された。

第二に、「文化擁護国際作家会議」(『文芸』昭10・9)では、《去る六月二十一日より二十六日まで三十八ヶ国を代表する多数の文学者によつて巴里に開かれた「文化擁護のための作家会議」は、敢へて世界とはいはぬまでも、少くとも欧洲文学史に新しき一頁を加うる一つの事件といふべきもの》だと会議の重要性を指摘した上で、《文化を破壊し、或ひは不当な強制を加へるもの、例へば……とか、さきにナチス一派がなしたやうな暴政、今後も屢々起るかも知れぬファシズムの弾圧等に具へんがための会議》だと、その性格が端的に規定されていた。さらに、同文には次の紹介が付される。

この会議の主要題目は要するに文化の擁護の件であつたが、同時に文学その他を含む広い意味の文化に対する誤れる觀念について、自由の確立、社会と作家個人の問題、階級闘争と文学、社会における作家の役割等々、今日の問題についても数千の聴衆を前にして論議するところが少くはなかつた。(192頁)

『セルパン』の記事と同様に、「文化の擁護」にとどまらない、会議の意義がここでも示されている。

第三として、《一九三五年の仏蘭西ほど、文化の歴史の上から見て、多事多難な年を迎へた事はさう多くはあ  
るまい》(19頁)と指摘する関口「世界文化情報 「文化擁護国際作家大会」特報」(『世界文化』昭10・9)が  
ある。<sup>(5)</sup> 関口は、《今回の『国際作家大会』を、《昨年の夏モスクヴァで行はれた『全ソヴェート作家大会』に出  
席したフランス作家の発案に係るもの》で、《その発展、対ファシズム的發展と考へて宜い》(20頁)と位置づけ、  
さらに、次のようなジツドの挨拶も紹介していた。

先づアンドレ・ジツドが拡声器の前に座を占めて、簡潔な開会の辞を述べ、次のやうに結んだ、《吾々が  
擁護しようとしてゐるこの文化は各国の特殊文化の累加から成つてゐて、この文化は吾々の共有物であり、  
それは吾々に共通 Commune であり、それは国際的である》と。(23頁)

同会でのジツドの発言は、アンドレ・ジイド／大野俊一訳「文化の擁護」(『文芸』昭10・9)として日本語で  
も訳出・紹介され、無署名「編輯室」(『文芸』昭10・9)においては、《日本の自由思想家や文学人に異常な衝  
撃を与えるべき、近來の大文字であると確信してゐます。乞三読》(208頁)と紹介されるほどの扱いだつた。

また、その日本での受容としては、青野季吉「文芸時評 ジードの「文化の擁護」論」(『政界往来』昭10・  
10)がある。《この会議の文化的意義はきわめて重大なもの》だと判じる青野は、《こんにちのこの国の文壇こそ、

かかる国際文学運動に最大の関心を示すべき時ではないか》(230頁)と、日本での反応の弱さに憤りつつ、《この社会がすでに行詰つて、文化の荒蕪期に入り、文化は促進される代りに、反つてファツシヨ的に拘束され、片輪にされる今日の段階においては、もつと価値ある文学といふものは、その社会に対立する文学以外のものでは、絶対にあり得ない》と主張していく。その上で、青野は右の一文を草した動機を、《たゞ一つ、この国の文壇が真の国際主義に眼ざめ、反ファツシヨ文化擁護のために、新たな眼を開かんことを願望したに外ならない》(235頁)と声明し、知識人の立場から日本の現状に抗する契機として「文化の擁護」を受けとめ、活用しようとしていく。

こうした姿勢が、短期間での挫折を余儀なくされた行動主義と繋がるものであることは見やすいが、この会議を同様の問題関心において受けとめ、早急に会議録をまとめたのは、やはり行動主義に関わつた小松清であつた。<sup>(7)</sup>小松清編『文化の擁護』(第一書房、昭10<sup>(8)</sup>)は、「編者の言葉」において小松自らが要約する通り、《今年六月、文化の擁護と国際ファシズム反対をスローガンとして巴里に開かれた国際作家会議に於てなされた主要な演説を集めた大会の報告書》(1頁)である。さらに小松は、同書の重要性について、次のように強調していく。

この報告書の重要性は世界の二十八箇国の文壇を代表する二百幾十人の文学者が一堂に会して、人間的ディグニティと文化価値の擁護のためにインテリゲンチヤとしての世代的な良心を自由に吐露し、またそれらの擁護のために共同の意志と協力の事実を証拠だてたこの画期的な会合の雰囲気と、そこに云はれた諸々の主張、提案、解釈、反駁を出来るだけ広汎な範囲に涉つて、日本の文化人に提供することによつて充分に顕

示されるものと、私は信ずる。(傍点原文、以下同)

さらに、読者が同書を読むことによつて、《大会に現れた今日の智識階級者の特殊な精神状態を感得されるであらう》ことが期待され、その内実として、第一に《近年來不断の危機を胎んだ国際情勢を前にし、それに伴つて各国に蔓延しつつある封建制度とバーバリズムへの復帰に直面した世界の進歩的インテリゲンチヤが最近著しくソヴェトに接近しつつあること》、第二に《この会議に参加した作家たちが文学的立場なり思想的傾向の上で、それぞれ個人的な特殊性と自主性を確保しながら、しかも共通の問題と協力行動の可能性を発見し、そしてそれらの問題や可能性をより鞏固な永続性をもつた根柢に置いたために、各自が最も率直なエスプリをもつて現代における文化の諸問題を自由検討したところ》(2頁)をあげている。それゆえに、小松は次のようにいうのだ。

巴里の作家大会にスタートした国際文化擁護の運動と、日本でも昨年来能動精神、行動主義の名において主張されてきた文化運動は、その組織や規模の上に於てこそ相差はあるにしても、その本質的なイデオに於て、その発生的な条件に於ては同インテリゲンチヤ一のものではなくとも、同じ方向と性格をもつたものである、と私は敢へて信じてゐる。従つて日本の能動精神、行動主義も今後それが歴史的に指し示めされた方向に進むことによつて、そして与へられた場所と機能の約束を果すことによつて、現代のインテリゲンチヤとして当然なすべき社会的な貢献を充してゆくことと思ふ。(3頁)

従って、先の青野の言表も含めて、日本における「文化の擁護」受容は、その言表化・言説実践を通じての、行動主義の再起動・変奏という一面をもつ知識人論でもあったことは、ここで確認しておきたい。

また、同書「会議の重要性」において小松は、会議の内容について、《五日の間、彼等は又、文化の意義について論議し、文学が正しい意味でのヒューマニズムと社会主義的リアリズムに向ふべき必要を確認した》、《個人と集団との関係についても論議され、彼等は二つのものの調和の上に立つソヴェト文化の優越性をも承認した》(17頁)と要約した上で、その成果については、文化・ヒューマニズム・ソヴェトを鍵語に、次のようにまとめている。

文化会議の成果は畢竟するに資本主義国家の文化人の間に存する深刻なる矛盾を明かにしたことと、その文化人の代表群が集つて反ファシズム、反………の為めの闘争を誓つたことである。又、文学思潮の上では社会主義的リアリズムと新しきヒューマニズムを認めて、その上に未来の文学を築くことを約束したことである。〔略〕誰もがソヴェト文化を論ずる為に集合したのではなかつたが、ソヴェト作家以外の全部の作家がソヴェトを、又その文化を讃へたといふことは重大なことであつた。(44～45頁)

ここには、『ソヴェト旅行記』(邦訳Ⅱ小松清訳、岩波書店、昭12)に代表される、ジツドの動向(とその日本での受容)が深く関わっていることは明らかだが、<sup>(9)</sup>逆にいえば、こうした問題関心こそが、この時期の知識人が考えるべき「文化」の急所なのだ。別言すれば、ヨーロッパの知識人(作家)に倣いつつ、資本主義／ファシズ

ムの跋扈するこの現実世界に抗して社会主義／ヒューマニズムを貫こうとする姿勢／言説こそが〈文化〉なのである。

また、単行本刊行時には「広告 文化の擁護／第一書房」〔『読売新聞』昭10・11・14〕が掲げられ、そこには『国際作家会議 見よ!!／堂々たるヒューマニズムの宣言』というコピーにつづき、次の紹介文が読まれる。

本書の編纂は英、米、独、仏、ソ連の文化雑誌全部を調査して苦心の結果あつめられたもので、例へばハックスレイの如きは、英仏のいづれの国の雑誌にも現はれず、ドイツの亡命作家の機関雑誌に於いて初めて発見したやうな次第であつて、これ等の報告が総合的に一冊にまとめられたのは世界中本書をもつて嚆矢とする。

さらに、興味深い文言としては、日本国内の文学状況についても次のような言及がみられる。

★かゝる世界的重要な会議をよそにして、日本の文壇が行動主義の排撃と文学賞の争奪戦と、身边小説の夢とに耽つてゐる有様は時代錯誤の甚だしいものと云つてよからうと思ふ。

★本書は日本文壇のかゝる瑣末主義的態度に対する嚴重な抗議であると共に文学全般の重要問題としてあらゆる流派と党派とを超越して今日の思想界文学界に真執な反響を求めんとするものに外ならない。(1面)

ここでは、「文化の擁護」およびそこに関わった西洋の文化人を、憧憬とともに称揚しながら、返す刀で、世俗的な些事に右往左往している（ようにみえる）《日本の文壇》が厳しく批判されている。極言すれば、理想的な（文化）モデルを西洋（文化の擁護）に据え、その評価軸から未熟な日本（東洋）が批判されているのだ。こうした「文化の擁護」言説をふまえて田邊耕一郎は「文化擁護運動の経験」（『文芸』昭10・12）で、『文化擁護の問題が、知性や良心の検討とともに再び知識階級のあひだの関心事となつてきつつあるかに見える』（109頁）という観察を示していた。ここでいう《関心事》には、次節で検討するもう一つの会議も含まれるだろう。

### III

太平洋戦争開戦後の知識人の反応として、シンポジウム「近代の超克」（『文学界』昭17・9、10）はよく知られているが、この企画には先行するモデルが想定されていた。それは、単行本化に際して付された河上徹太郎「近代の超克」結語」（知的協力会議編『近代の超克』創元社、昭18）によれば、次の通りである。

これに形式の類似した会議は、十年許り前、国際連盟の知的協力委員会で開催された、ヴァレリイを議長とした数次の会議であらう。そこには、既に矛盾を曝露し初めたヴェルサイユ条約の、応急弥縫策としての知識人の動員が見られてゐる。この目的のために巧妙に案出された議題は「欧羅巴人は如何にして可能なるか」といふ命題である。一流の知性人が、その知性の限りを尽して、知性から肉体を剝奪するに努力してゐ

る。そして議事進行中努めて政治的発言を戒めてゐることは、結果として全体の趣旨を著しく政治的効果の上で強めるのに成功してゐる。(182頁)

知的協力国際協会シンポジウムについては、日本語文献からその概要を把握することが思ひのほか困難なので、以下に『ヴァレリー全集』の記述に即して整理しておく。<sup>(10)</sup>

▽第一回「ゲーテ百年忌記念」から

Entretiens I : Sur Goethe a l'occasion du centenaire de sa mort, 1932

国際連盟の知的協力国際協会は、第一回の談話会として、一九三二年五月十二日から十四日の三日に亙り、市長の招待により、フランクフルト・アム・マインで、ヨーロッパの知識人十八名を招いて、ゲーテ逝去百年を記念して「ゲーテ談話会」を開催し、ベルギーのジュール・デストレを議長として、ヴァレリーもこれに加わった。第一日は「ヨーロッパ人ゲーテ」という題目であり、ヴァレリーは『ゲーテ私観』と題して『ゲーテ頌』の数節を省いた演説を四人目として最後に行い、続いて「談話」に入って発言し、第二日目(題目は「芸術」)の談話でも発言している。

▽第二回「文化の将来」から

Entretiens II : L'Avenir de la Culture, 1933.

第二回は一九三三年五月三日から七日まで、スペイン政府の招聘により、マドリッドで、キュリ・スクロドフ



スカ夫人を議長として二十一名が参加した。会議最終日の議決を討議しているところに、スペインの文部大臣デ・ロス・リオスが登場して一言述べたのに対し、議長キュリ夫人は、ヴァレリーが学芸小委員会の元の委員であり、その事業の主唱者の一人であるからと、その答弁を指名した。

▽第三回「ヨーロッパ精神の将来」から

Entretiens III : L'Avenir de l'Esprit Européen, 1934.

第三回は一九三三年十月十六日から十八日まで、ヨーロッパ協力フランス委員会の発議と準備により、パリの知的協力国際協会で、ヴァレリーを議長として、二十五名が参加した。ここでは「ヨーロッパ研究連盟」設立が議決され、ヴァレリーがその会長に選出された。議事録は『精神の将来』と題し、佐藤による全訳（昭和十一年）がある。

▽第四回（未詳）

▽第五回「現代人の形成」から

Entretiens V : La Formation de l'Homme modern, 1936.

第五回は一九三五年四月一日から三日まで、ヴァレリーを所長とする地中海中央研究所の落成式を兼ね、ニース市の招待によって、ヴァレリーを議長として、十六名が参加した。議事録は『現代人の形成』と題し、佐藤による全訳（昭和十二年）がある。

▽第六回「新しきヒューマニズムへ」から

Entretiens VI : Vers un Nouvel Humanisme, 1937.

第六回は一九三六年六月八日から十一日まで、ハンガリア政府の協力により、ブダペストで、前回「現代人の形成」の続きとして、ヴァレリーを議長に、二十八名が参加した。開会閉会は科学翰林院において、会議は国会で行なわれた。

▽第七回（未詳）

▽第八回「文芸の近き運命」から

Entretiens VIII : Le Destin prochain des Lettres, 1938.

第八回は一九三七年七月二十日から二十四日まで、「知的協力月間」の一事業として、パリの知的協力国際協会で、ヴァレリーを議長として、学芸常置委員会会員（二十名）と招待文筆家十四名（二名欠席）で行なわれた。議題は議長によって提出された。

一九三八年十月、再びニースの地中海中央研究所で開催され、ヴァレリーの提出する「質と生活」を議題とする予定の第九回談話会は、実現せずに終わった。

してみれば、日本語による翻訳・紹介としては、いずれも佐藤正彰訳による『精神の将来 欧羅巴精神の将来』（芝書店、昭11）と知的協力国際協会編『現代人の建設』（創元社、昭12）の出版によるところが大きい。

第一に、『精神の将来』から確認していけば、単行本末尾には、次の文章（無題）が付されていた。

「欧羅巴精神の将来」に就いての談話会は、一九三三年十月十六日より十八日に互り、巴里「知的協力国

「欧羅巴協力仏蘭西委員会」の発起である。「仏蘭西委員会」及び「欧羅巴協  
力連合委員会」会長エミール・ボレル氏、ポオル・ヴァレリイ氏、「国際協会」理事アンリ・ボネ氏、及び  
「欧羅巴協力委員会」書記長ジュウル・レス氏より成る「組織臨時委員会」が事務の準備をなした。ポオ  
ル・ヴァレリイ氏が審議を主宰し、審議には以下の諸氏が参加せられた。「以下略」（頁表記なし）

出版後の反応―受容としては、次に引く青野季吉「文芸時評」「精神の将来」について（『政界往来』昭11・  
10）がある。まず青野は、読後の印象を次のように述べていた。

この書について佐藤春夫氏はヨーロッパの文人や思想家の社会的関心の強いのに驚歎してゐたが、私も最近  
この書を通読して、近来にない感動をおぼえ、かついろ／＼なことを教へられた〔。〕そして恰かもこの書  
は、われ／＼アジア人のアジア精神といふもの、更に狭く日本精神といふものを考察する上に、一つの大き  
な照明ともなり、手引ともなると知感した。

同書では、ヨーロッパ人によるヨーロッパ人のための議論が展開されているのだが、にもかかわらず／＼それゆ  
えに、青野は《アジア人のアジア精神》や《日本精神》を考へるための《手引》（214頁）となると意味づけてい  
る。そうした青野が《もつとも興味のあつた一二の論点》としてあげるのは、第一に《ヨーロッパ精神といふも  
の、即ちヨーロッパの各国民に共通のエスプリといふものは何であるか、そくいふエスプリは、現存するかとい

ふ根本的の問題》(216頁)、第二に《現在のナシヨナリズムにたいする批判》(217頁)、そして第三に《ヨーロッパ精神と理知又は知性といふものとの関係》(218頁)であり、《ヨーロッパ精神》を軸とした読解の痕跡は明らかだろ。

また、陶山務「槍騎兵 日本精神の将来性」(『東京朝日新聞』昭12・4・15)も同書への反応として書かれており、《これ「精神の将来」は一時的な流行性を対象としたものではない》、《ポオル・ヴァレリーの議長振りも鮮やかだが、各国の委員の討議も最高の意味に於いて根本的である》、《知性一乗的である》(7面)と絶賛されていた。

第二に、『現代人の建設』は、本文に先立ち、無題の次のような会の由来・概要が記されている。

「国際連盟文学芸術委員会」は「知的協力国際協会」に対し、現代人の形成に關して生ずる諸問題に就いて連続談話会を準備すべきことを要請した。

「委員会」は、かくも広汎にしてかかる重要性を有する題目は、唯一回の会合に於いて著手解決せらるるを得ず、最初に先づ、第一回の討論に於いてその主要なる諸相を抽出するが適當であると思惟した。又事実、人間の将来に対する本質的諸問題に宛てられたるこれ等の定期的会談に於いては、限定されたる題目を取扱ひ、漸次系統的研究を誘導し、かくして提起せられたる諸問題に全体的回答を齎すが可であらうといふ意見が、既に表面せられてゐたのである。

最も緊急なる任務は、蓋し、技術の日毎の進歩によつて深奥より変じた世界に於ける現代人の觀念を定義

し、以てその形成の様々なる要素、新しき生活条件によつて及ぼされる影響、指示し得らるべき将来の大綱を闡明するに在る。

続いては、人間個性を十分に伸張し、個人に一般的進歩に基づく諸獲得の福利を保証することを許容しつつ、同時にその個人的寄与に最大の価値を付与することを得るが如き教育原理を決定することが、適宜であらう。かくして、常に一層改善せらるる教育手段、絶えず拡大せらるる可能性と、獲られたる結果の中に在り得る未だ不備なるもの不完全なるものとの間の、屢々著しき対比の理由を研究し、且つは人智の全体が日々増大する現代に於いて、過度の専門家と相互的不理解との危険は、如何にして避け得らるべきか、又如何にして時に応じて一般文化の擁護を保証し得べきかを稽へるに到るであらう。

この結果、「現代人の形成」に関する「談話会」は、一九三五年四月一日より三日まで、ニイスに於いて、同じ機会に、ポオル ヴアレレイ氏を理事とする地中海大学の落成式を行つた市当局の招請に基づいて、開催せられた。(頁表記なし)

なお、同書は「広告 現代人の建設」(『文学界』昭12・10)において次のように宣伝されていた。

曩に『文学界』の同人達が本書をテキストに用ひて「座談会」を催されたことによつて見ても、本書が如何に価値ある指導的文献であるかが立証される。たとへば、知識と大衆との問題とか、或は教育の問題とか、或は人間はなにを求めるといふやうな幸福論とか、合理主義と非合理主義とか、知識人刻下の重要問題の

殆ど凡てが本書に網羅されてゐるといつても過言ではない。(頁表記なし)

右に言及のみられる座談会とは、河上徹太郎・青野季吉・小林秀雄・阿部知二・島木健作・林房雄・三木清・佐藤正彰・横光利一「座談会「現代人の建設」について」(『文学界』昭12・9)である。縦横無尽に展開(放談)される座談会を要約することは困難だが、ここでは発言の重なった論点について、三つの主題―論点を確認しておきたい。

論点①は、ヨーロッパ(西欧)という主題(歴史・環境)についてである。阿部知二に次の発言がある。

この前の「精神の将来」にしてもこれ(『現代人の建設』)にしても、殊にこれには最後にはそれが問題になつてゐるところですけれども、彼等は一まづヨーロッパの文明、ヨーロッパの平和、ヨーロッパの統一といふやうなことを一致して考へようといふ事を言つてるし「精神の将来」にしてもまづヨーロッパの精神の将来といふことを考へてゐるんです。(221頁)

これは単なる事実確認にとどまるものではなく、危機も含めて問題になっている範たるヨーロッパが、西洋文学に親炙した文学者にとつても、今なお届き得ない対象であることを自覚する契機でもあるのだ。そのことについては、島木が次のようにして率直に、彼我の溝を言表している。

僕等はヨーロッパの十九世紀を生きてきてはゐない。こゝで危機とか不安とかいふことを言つてゐる、近代が終つたといふ言葉の内容は、ヨーロッパ文化のはやくいへば行詰りなわけだが、僕らには、そのヨーロッパ文化の行詰りといふことが、この談話会の人達のやうには、切実なものには感じられない。我々が、危機や不安を論じてゐても、問題はかういふふうには展開しないだらうと思ふ。(227頁)

こうしたヨーロッパ独自の重みをもつた概念も、もちろん日本に移入されてきたのだが、その差異がいかに現実的な局面で現象するかについては、翻訳の難問を想起するまでもなく、この座談会でも問題化されていく。

それが、第二の論点であるヒューマニズムである。この論点についても、まずは阿部の発言を引く。

今度の「現代人の建設」といふものの探求の中心は「ヒューマニズム」の問題だらうが、いかなる人間が望ましいかといふことを考へる、そのヒューマニズムも結局「ヨーロッパ的なヒューマニズム」で、この会議に手紙を寄せてゐるトーマス・マンの他の処でした演説が「セルパン」に訳されてゐるが、そこでもヒューマニズムといふ観念はヨーロッパと結びついてはなすことはできないと言つてゐるが、さういふ点に対してわれわれが考へると、ヨーロッパのインテリゲンチアが集つて現代を論じてるのがわれわれにとつてはまた彼等が言つてることだけとちがつた複雑な興味が出てくると思ふのです。(221頁)

こうして、彼我の溝を意識しつつも、日本の文学者にとつても興味深い論題として、ヒューマニズムがくくり

だされる。これに対して、青野は次のように言表している。

科学文化といふものが人間を圧迫する、人間のつまり生命をね。ぢやあそれに対して、つまりそれをはねのけて人間尊重の精神とかヒューマニズムの精神にゆく、それにはいかにすべきか。さういふことを実現するところの人間だね、いはゆる新しい人間だ、望ましき人間はどうだといふ、つまり今までのヨーロッパの文明の一番強味であるところの科学文明に対する疑かな、さういふものから出発してらんぢやないかね。(227頁)

もちろん、科学とは西洋科学の謂いであり、そうである以上、右に捉えられようとしているヒューマニズムとは、科学のあるところ、つまりはヨーロッパにおいてしか本質的には捉えられない難問なのかも知れない。従って、こうした難問―ジレンマをも知悉する阿部が、次のように言表するのは当然のなりゆきでもある。

ぼくが言ひたかつたのは日本でわれらが理解し、求めてゐる「ヒューマニズム」とこのヨーロッパ人の「ヒューマニズム」との間に世界の人類として共通的な統一的なものがあるだらうかないだらうかといふことをこゝで論じようと言つたんだ。さうすると、ちよつと横道にされるが、ヒューマニズムの解釈だね。(略) ぼくはヒューマニズムをかう考へてゐるんだ。時代とか民族を超越して人間が人間であらうといふのだから、さういふものは人間の本能的、抽象的なものだらうと思ふ。さうして各民族、各時代に応じて…(232～233)



こうして、その内実を議論する以前に、ヒューマニズムという概念（の来歴―含意）において、日本の文学者はつまずいてしまうのだ。ならば、現実的な日本の局面においてどうかといえ、小林／三木に次の発言がある。

小林（略）たとへば政治思想が今みたやうになつて来るとヒューマニズムの立場といふものを、政治的立場と対立させて政治と喧嘩するだけの力をもたなければならぬ。この本なんかで知識人たちが喧嘩するのは最後は政治思想だよ。政治思想にたいして、ヒューマン・インテレクト<sup>マ</sup>固守する点に彼等のヒューマニズムが現れてゐるんだ。さういふやうな力を日本のヒューマニズムが蔵してゐないといふことは、これから西洋の文明がどん／＼日本にはいつて来て政治的關係、經濟的關係がだん／＼國際的色彩を帯びて来るだらう、さういふ場合に今までの日本の傳統的ヒューマニズムといふものがよく行けばいゝけれど、悪く行くとこれは政治に屈従する、屈従してしまふ危険性が非常に日本のヒューマニズムは多いと思ふ。

三木 さう、そこはばくも非常に問題だと思ふね。ヒューマニズムはある意味では政治の批判者だと思ふ。さういふ批判者が非常に必要なんで、殊に現代に於てはさうなんだね。さういふ批判者の意味をもつてゐないで政治について行けば、東洋のヒューマニズムといふものは儒教あたりからずつとさういふのだらうと思ふが、さうすればヒューマニズムの機能は全然果されない。殊に今のやうに政治の独裁が激しい時には。

このように、ヒューマニズムという主題の重要性は、座談会参加者の多くに認められながらも、それぞれの理解や、日本においていかにヒューマニズムが成立するかについての具体論は、意見の一致をみることはなかった。最後に、論点③として文学者・文化人の社会的地位がある。この点については、林に次の発言がある。

僕がこの本を読んで非常に力強く感じたのは、ヨーロッパの思想家および文学者といふものがわれわれが希んでる様な——この本の中では自ら聖職者と名乗つてゐるが——そのやうな社会に対して責任をもつた文化人としてあらゆる問題を論じてゐるといふ事。それに対しては日本の今の文学者といふものはいろいろ長所をもつてゐますが、あまりに近過ぎるせいか、こゝに論じられてゐるやうな問題にくらべれば、あまりに距離のある問題の中に終始してゐるやうに思はれる。それに対してわれわれはさういふ境地から抜け出てこの本に現れてるやうな聖職者としての仕事をしたい、さういふ希望をもつて何年間か仕事をしてきたんですが、それがヨーロッパで立派に行はれるといふことには非常に羨望を感じたわけです。(223頁)

昭和一〇年前後には、日本でも広い意味での文学者の社会(性)が議論されていたが、この点についても、先行するヨーロッパは憧憬の対象であり、日本はそれに追いつくことを目指していく。佐藤にも次の発言がある。

僕の言ふのは世界文化への独自の貢献、協力です。日本も今まで大いに西洋に学んで来たし学んだのだから、

西洋文化と協力して人類文化といふやうなものをそろく考へてい、頃だ、また確かにさういふものを考へてい、だけのさういふ一種の世界文化上の役割、配分といふやうなものが日本人にはある、さう思つて差支ないのぢやないか、さういふ意味です。(232頁)

これもまた、文学者による社会参加／社会参加する文学者を目指しての言表とみてよいだろう。

総じて、『文学界』座談会では、文字通りの当事者として、西洋文化にもふれてきた出席者たちが、自らの興味関心に即して、縦横に意見を戦わせていたといえる。これは、逆にいえば、『現代人の建設』において展開された論題が、日本においても議論すべき普遍的な課題だと謂うことでもある(彼我の溝はつきまとうにしても)。同書については、書評も二件確認できている。

第一に、徳永泰「知的協力国際協会／佐藤正彰訳 現代人の建設」(『唯物論研究』昭12・10)がある。《一読先づ関心させられた点は座談会の形式的側面》だという徳永は、《必要な節度を失はずに夫々卒直に意見を闘はせてゐること、そしてその間に示されてゐる談話の技術の巧妙洗練、これらの点は流石に西洋の良識だと思はれた》と感嘆している。さらに、内容について徳永は、次のように述べていた。

内容で誰しも興味のあることは、先づデリケートな西洋諸国の政治的關係が、この知的連盟に如何に反映してゐるかといふことであらう。併しそれについては、協調の精神は最後までもちろん失はれないが、英仏を始め諸国の民主主義及平和主義的国際主義を反映して、イタリア人の眼前で反ファシズム的文化の擁

護がかなり露骨に叫ばれてゐること、巻頭にのせてあるトマス・マンからの云はばファツシズム抗議文が三日間の会期を通じて幾回となく幾人かによつて取上げられてゐること、を紹介するに止めよう。

そこで問題は知的連盟の一員としてのと共に一般知識人文化人の問題となる。政治と知性、国家と個人、そして一般に人間の問題が一貫して真剣に論じられてゐる。但し高級知識人としてのかかなり上等な条件に於いて。このことは論議の本質と限界を知る上に重要な点だ。(189頁)

ここに、「文化の擁護」とも共通する西洋文化人による反ファシズム、さらには『文学界』座談会でも論じられた論点を受容し拡声されていることは明らかだろう。もう一点つけくわえるならば、こうした議論が知識人向けのものであり、そこに《本質と限界》が指摘されていることも、この会議・書物の重要な特徴である。

第二の書評は、『文学界』座談会にも出席していた小林秀雄による、「翻訳短評 佐藤正彰氏訳『現代人の建設』(『東京朝日新聞』昭12・11・15)である。小林は、本書全体の特徴を《現代が直面してゐる文化の危機にいかなる態度をもつて臨むべきかについては各人各説で、一つの結論は直に新しい問題を生むといふ風だが、文化の危機といふ一般観念については各代表はまことに明瞭なイメージを抱いてゐる》と指摘した上で、一連の議論において《政治問題に少くとも直接には一切触れてゐない》ことに注目し、次のように論じている。

これを、政治問題を離れて現代文化を論ずる空しさと評し去るのは容易だが、この空しさを空しさとせず、政治に対する精神の優位を、政治の政治的に批判を超えて政治そのものに対抗する知性の力を頑固に信じて

るる彼等の自信は敬意を表するに足りるのであつて〔 〕この事は、わが国で文化批判者といはれてゐる人々が殆ど政治問題の重要性を過重視する人々に限られてゐるといふ特殊な光景を、僕等にはつきりさせてくれる。(4面)

ここには、小林が『文学界』座談会でヒューマニズムについて述べていたのと同様の論理がみてとれる。つまり、現実的な政治と《知性の力》の軽重について、西洋文化人において社会的な関心はごく普通に抱かれるものであつて、ことさらに政治的になる必要はないという彼我の溝が、皮肉交じりに綴られているのだ。

総じて、本稿でとりあげた文化擁護国際作家会議、知的協力国際会議、いずれもヨーロッパという歴史・環境を前提としつつ、ヒューマニズムを掲げてファシズム(政治)に抗する文化(人)像が、日本の知識人を介して翻訳・紹介されていった。これらが、昭和一〇年前後の日本における、世界化する〈文化〉の一面であつた。

#### IV

本節では、日本国内で論じられた〈文化〉論として、日本文化の海外紹介に関する議論を検討したい。たとえば、慶田茂「文化外交の大衆化」(『改造』昭11・7)では、次のような批判が展開されていた。

凡そ文化外交をして最も効果的ならしむるには、日本現下の特殊な政治的経済的性格の上に立脚しての

自主積極的文化外交の確立をなさねばならない。ところが現在わが国文化外交の実践的指導機関たる外務省文化事業部および国際文化振興会は、一体如何なる信念と計画の下に文化外交の發展を期せんとし、あるのか。〔略〕何れを先にし何れを後にすべきかの主従軽重、脈々たる体系を見出し得ない。而も又それらが外国の追隨模倣たるに至つては、如何に文化外交樹立に當つて先づ要請せらるべき文化内容決定の問題に關して、その無定見を曝露してゐるかを知るべきである。(53頁)

こうした現状認識に即して慶田は、『文化外交の自主積極性』に關して、『國際文化外交に於いては大衆的近代性』を、『特に對支文化外交に於いては全面的技術性および新生東洋主義理論の確立』を主張していくのだが、その『共通の原理』とは、『文化外交の「大衆化」』にあるのだと論を進める。慶田は『文化外交の大衆化』について、『第一、文化外交主体の大衆化、第二、その対象の大衆化(「」)第三、文化内容の近代性』(56頁)と分節しながら詳論していく。その際に慶田が注意を払うのは、次のような日本文化の特質に応じた発信・輸出の方法である。

蓋し東洋文化は所謂深奥幽玄なるが故に、突如として文化脈の異なる欧米人をその真髓に導引することは、固より困難なことである。然し私の所謂日本文化外交の大衆化を媒介とするならば、かれらに東洋文化理解への容易なる階梯を与へ、茲に初めて東洋文化の「幽玄の領域」に誘ひ得るの端緒と為し得るであらう。(58

頁)

本稿Ⅰでもその所説をとりあげた田中耕太郎は、「国際文化運動の理念」〔『改造』昭12・1〕において《日本精神文化の掛け声に応じて色々な公私の施設が出現し、従来等閑視せられてゐた方面の研究が盛んになつて来たことは結構なことであるが、それと同時に西欧文化の軽蔑と云ふ甚だ好まからぬ傾向を助長したことも認めなければならぬ》という現状認識を示した上で、『矛盾した現象』に注目する。それは、田中によれば《日本固有文化の強調と同時に国際文化に対する関心が現はれ始めた》ことで、『我が外務省においては数年前文化事業部を拡張し、単に対支文化事業に止まらず広く欧米諸国に対する文化的活動を開始し、その成績相当顕著なるものがある』（5～6頁）と、先の慶田とは異なつて日本の海外向け文化事業を高く評価する。しかもそれは、『国際文化の問題が国民大衆一般の興味の一中心になつてゐることは疑なき事実』（6頁）だと評すように、ここでも知識人に限られた問題としてではなく、大衆向けの事業であることが強調されている。さらに、田中は《たとひ政治上には国際連盟を離脱するも世界の文化、人類の福祉の爲めに我が国の致すべき事業は益多く、我が国の天職がこの点に於いて一層重きを加ふことは柄として大詔に明かである》（10頁）と、後の排外主義的ナショナリズムにつながるような論理をすべりこませつつ、それでもなお、次のようにして国際文化事業の必要性を説いていく。

国際文化事業は文化の高貴な理念を自覚し、国家宣伝の道具、文化的帝国主義のお先棒と云ふ喜劇的役割の演出者になり下らないで、直接に国家の本来の使命、その道徳的使命に奉仕しなければならない。さうして

このことは又人類の道徳的使命の完成に貢献することを意味する。文化の進歩、その道徳への奉仕の道程に於いて、民族的立場と国際的立場とは決して矛盾するものではない。そこにナシヨナリズムとインターナシヨナリズムとの微妙な調和が存するのである。(23頁)

こうした、満洲事変以降の日本の国際政治的な立場に配慮した、国際文化事業の位置づけは、新居格「日本文化の海外進出」〔『改造』昭12・3〕にもみてとれる。同論で新居は、《日本とそして日本文化を正しい姿で現し諸外国特に欧米人の理由なき誤解を解くばかりでなく日本文化の真価を認識させる意味で日本文化の海外進出を意図することは当然としてい、》(8頁) という前提の上に、《私の考へたいこと》として、《日本文化の海外紹介は現在関係諸機関が把握してゐるらしい方針がその儘でい、かどうか》、《現存する諸機関の体制は果して何の欠陥もないものかどうか》をあげる。後者については、《現在のそれは貴族趣味と官僚気質とが強過ぎると思ふ》と、やはり大衆向けであるかどうかという観点から批判している。さらに新居は、《日本文化の解釈についても常に復古的傾向にのみ偏する必要はないのではないか》、《日本文化の海外紹介にしても特に誇示的態度を強くもつこと、即ち宣伝に力点を置き過ぎることの利害得失も考へるに値する》(10頁) といった課題をあげてもいた。

ただし、こうした日本文化(の海外発信)を論じて狭隘なナシヨナリズムにも配慮するといった姿勢は、日中開戦前夜から保ちにくくなってくる。それは、本稿Ⅱ・Ⅲでとりあげた国際会議の背景と同様、ファシズムの季節が日本にも訪れるからに他ならない。向坂逸郎「政治と文化の相剋」〔『改造』昭12・4〕には、次のようにあ



る。

ファシズムは、資本主義がすでに『国民』又は『民族』を失った時代に現はれて、強力政治の統制に服する統一ある『国民』を作り上げなければならぬ。だから、ファシストは民族主義者である。科学も芸術も民族的であることを要求する。〔略〕本来さういふ性質であり得ない社会状態の下に、民族文化を作らうといふのだから、文化は機械的に政治に指導されることになる。つまり吾国には、かういふ意味で再び文化の上に、ウルトラ政治主義の時代が来るであらう。それは、ドイツではすでに実行されてゐる。これは、他の側面から見れば、政治による文化の破壊である。(17頁)

日本の文脈でいえば、日中戦争の開戦が契機となつて、たとえば無署名「編輯後記」(『文芸春秋』昭12・10)において、《○今や文化の問題も亦戦争と結びつけることなしには理解し得ない》(464頁)といった認識のもとに、特集「戦争と文化」(『文芸春秋』昭12・10)が組まれる。この特集に新居格は「戦争と娯楽」をよせ、《戦時下に於ける民衆の娯楽は、著しく戦争色によつて彩られ、毎日毎夕の新聞は、戦争とそれに関連することで大部分が埋められ、娯楽雑誌にも、戦争物語若くはルポルタージュが満載される計りでなく、戦争小説さへが問題になつて来る》と、《戦争下にある各国共通の社会現象》(200頁)として日本の現状を描きだしていく。浅野晃は「戦争と思想」において、《今度の事変を機として、思想統制とか、思想動員とか云ふことが問題となつて来てゐる》、《もちろんこれは何も日本だけの問題ではない》(209頁)と、世界的なファシズム―統制の風潮を指摘する。その

上で、浅野は《わが国に於いては、一体如何なる思想を中心にその統制なり動員なりを實行しようとするのか》という問いを立て、それについて《今回の事変はかうした難問を難問として持ち出させたと云ふだけでも、思想的、文化的に、大きな意味を有つ》(210頁)と受けとめ、国際文化事業に関わる次の見解を示して同論を閉じる。

われわれは、何はともあれ、自分自身に就いてあまりに知るところ少なく、それ故に、真に他を知ることもなく、知らうとすることもなかつたのである。また知らうともしかなかつた。われわれの将来の日本は、この反省からのみ生まれるのではないだらうか。若しそうだとしたら戦争から、思想が生まれるだらう。そしてその思想は世界史の次の段階の為に大きな役割を果たすに違ひない。(211頁)

昭和一〇年代の歴史の中で、その後、浅野はやくから国民文学論<sup>②</sup>を唱えては、アジア・太平洋戦争を積極的肯定するイデオログとなっていく。その転換点は、ただ日中戦争開戦ということばかりでなく、「日本的なもの」の隆盛や、本稿で検討してきた二つの国際会議の影響力低下といった、おそらくは通底する世界的な潮流もあって、昭和一二年にみることができる。阿部知二は「歳末の対話(2) アイデアリズムに就いて」(『東京朝日新聞』昭12・12・31)という甲乙の対話形式による年次総括において、次のように書いていた。

例へば、僕がこの一年で強く印象づけられたことは、『文化』といふ流行言葉の皮肉な運命だつた。『文化の擁護』といふ熟語が、いつのまにか、『文化工作』になつたといふ転変。(7面)

ある立場からみて《皮肉》だということは、別の立場からみれば、好ましい《転変》に映じるだろう。こうした《皮肉》は、本稿Ⅱ・Ⅲでとりあげた二つの国際会議の紹介・拡声に関わった文学者の多くが、後に「近代の超克」に関わっていくことにも指摘できる。こうして昭和一〇年代の〈文化〉論は、大きく舵がきられていった。<sup>(13)</sup>

## 注

- (1) 平野謙『昭和文学史』（筑摩書房、昭38）、7頁。
- (2) 同会については、芝崎厚士「近代日本と国際文化交流 国際文化振興会の創設と展開」（有信堂高文社、平11）、堀邦雄「日本文学の海外への紹介——国際文化振興会と角田柳作」（『日本大学芸術学部紀要』平30・10）ほか参照。
- (3) 本稿では、実体的に語られる文化（現象）一般ではなく、言表（言語化）された言説上の文化を〈文化〉と表記し、検討対象とする。
- (4) 山本亮介「日本文学の翻訳出版をめぐる——昭和戦前・戦中期の意味に触れつつ——」（『昭和文学研究』平24・9）、122頁。
- (5) 『世界文化』誌上の「文化の擁護」に関して、新村猛『世界文化』三十年代の政治思想的証言（三一書房、平6）も併せて参照。
- (6) 新聞の匿名批評欄には、後述の『文化の擁護』刊行後、車引耕介「壁評論 ファビオ・ファツシズム」（『読売新聞』昭10・11・10）が掲載され、『何しろ世界各国の二十数人の文学者が一堂に会してげんざいの文学が当面してゐる、あらゆる問題を論じてゐるんだから、これ位、興味のあるものはない』（9面）と評された。
- (7) 行動主義（とその変奏）に関して、拙論「リアリズムのゆくえ——饒舌体・行動主義・報告文学」〔昭和一〇年代の文学場を考える 新人・大宰治・戦争文学』立教大学出版会、平27）参照。
- (8) 今日では、ジッド・マルロー・アラゴンほか／相磯佳正・五十嵐敏夫・石黒英男・高橋治男編訳『文化の擁護 1935年パリ国際作家大会』

- (法政大学出版局、平9) によって、より正確な様相が把握できる。
- (9) 國分俊宏「訳者あとがき」(ジッド『ソヴィエト旅行記』光文社、平31) ほか参照。
- (10) 佐藤正彰訳「知的協力談話会議事録から」(『ヴァレリー全集 補巻2/補遺 講義・講演 対談』筑摩書房、昭58)、331頁。371頁。
- (11) 拙論「昭和一〇年前後の私小説言説——文学(者)の社会性」(『昭和一〇年代の文学場を考える』前掲) 参照。
- (12) 拙論「昭和一〇年代の国民文学論——文学場のインターフェイス」(『日本研究』平31・10) 参照。
- (13) 拙論「昭和10年代における〈文化〉論……I——大政翼賛会文化部長・岸田國士の発言を中心に」(『湘南フォーラム』平31・3) 参照。